観世音菩薩挾間西国三十三霊場現況調査

坂本勝信

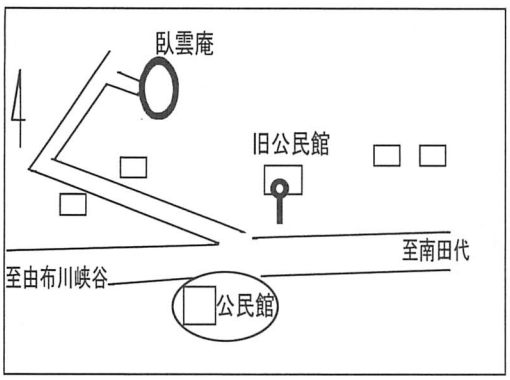
挾間ふるさと研究会が昭和五十八年頃選定したと推定される「南無大悲観世音菩薩挾間西国三十三霊場」について現地を訪れ、現在の状況について調査した。小野三郎氏の記事にあるように、ふるさと研究会が人々の心に素朴な民間信仰の心が蘇ることを願ったであろう思いを念頭において、その現況を調べました。

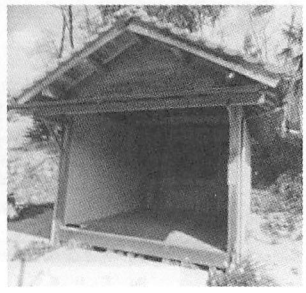
二十五番霊場詰臥雲庵

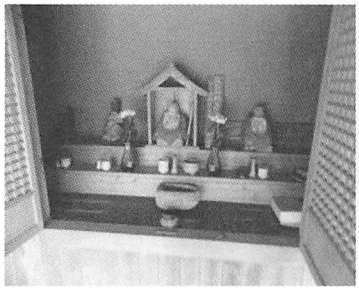
（一）所在地

挾間町大字内成字詰

コミュニティバス停「詰公民館前」付近







（二）管理の主体

団体（周辺の約十戸）で管理

（三）祭りと行事

一月二十四日と八月二十四日にお供えを持ち寄り、般若心経と観音経をあげている（僧侶は呼んでいない）。そのあと、お供えを頂いている。庵の掃除は岡さんが、ほぼ毎月実施している。

（四）由来、由緒

詳細は不明である。

臥雲庵周辺の民家を尋ね、たまたま居合わせた岡幸正さんの奥さんに聞取りを実施した。庵の敷地は最近整備されており、岡さんが平成二十五年庵の敷地内東側に子育て観音と道祖神を寄贈し、その際入り口道路や庭に砂利石をまいて整備したとの由。

庵の西側にはおそらく村内に散在していたであろう一石一字塔や寛政年間の平野喜三衛門願主千手観音などが無動作に並べられているが、庵内に安置されている仏像の幼稚な作りに比較して、それなりの歴史を感じさせられた。庵自体は観音堂ではなく、大師堂と思われる。

下のバス停付近から「子育て観音」のカラフルなのぼり旗が数本立てられて、道しるべとなっている。

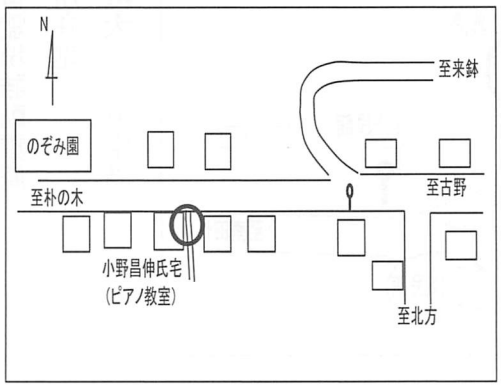
内成村寺院記録（由布市民俗資料館蔵）に白龍山臥雲寺の記載あり、その後廃寺となったこの臥雲寺の跡地か。ただし挾間町史には旧公民館が臥雲寺跡地との記述があり、よく分からない。

二十七番霊場赤野旧田口宅前観世音

（一）所在地

挾間町赤野四九七―一小野昌伸氏宅東側

由布市ユーバス停「赤野」付近



（二）管理の主体

個人（小野昌伸氏）

（三）祭りと行事

「お接待」の日は、お供えをあげている。

（四）由来、由緒

宅地として小野さんが購入した時、敷地内道路側に野仏がたくさんあった。平成元年頃、家を建築する段階で、大分市高城のお寺に相談し、現在の四体以外はすべてそのお寺に引き取っていただき、四体を家の塀に沿った場所に集めて安置した（小野昌伸氏）。

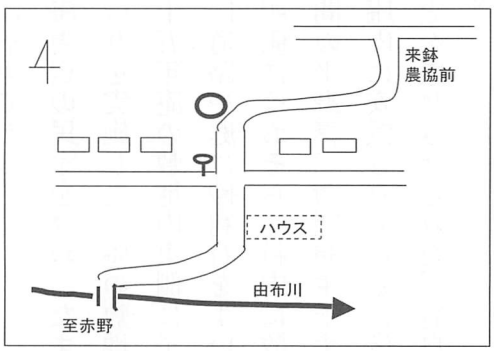
右から「奉寄進若年中」碑、「南無大師遍照金剛」碑、「大乗妙典日本廻国納経」碑、「如意輪観世音菩薩」左端に「二十九番松尾寺」碑の五体が整然と並べられている。

二十八番霊場下来鉢大師堂観世音

（一）所在地

挾間町来鉢二五九四番地（佐藤久生氏所有地）

由布市ユーバス停「下来鉢」付近



（二）管理の主体

団体（下来鉢班）で管理、年二度、盆正月前に集まって草取り作業を実施している。

（三）祭りと行事

「お接待」の日は、堂に安置されているお大師様を当番の家に持ち帰り「お接待」をしていたが、だんだんお参りする人もなくなったので、平成二十三年ごろから「お接待」もなくなった。

（四）由来、由緒

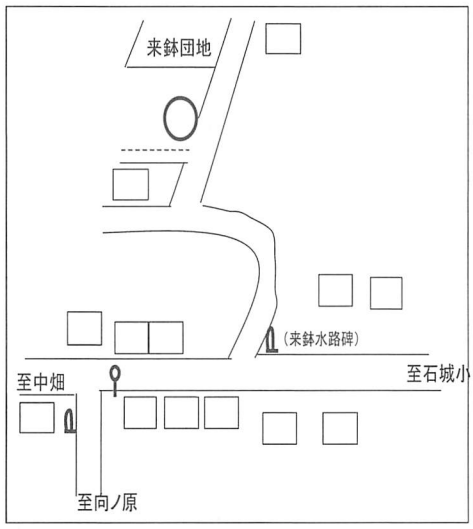
戦後あの場所に庵があって、尼さんがすんでおられた。尼さんがなくなったあとお大師さんも一緒に祭ってお堂となった。その後道路の整備の際あちこちにあった石塔等も「預かる」ようになった。所在地は佐藤家の本籍となっている（佐藤久生氏）。

二十九番霊場来鉢辻観音堂

（一）所在地

挾間町来鉢（辻）

由布市ユーバス停「来鉢農協前」付近



（二）管理の主体

団体（辻班）で管理

半年交代の当番制でお堂の掃除、花飾り

（三）祭りと行事

一月と八月に地蔵講として、金光寺住職による納経

お接待は実施している（池永悦子さん）。

（四）由来、由緒（加藤照廣氏執筆、「辻地蔵堂」から）

＊　本尊は「地蔵菩薩像」である。この地区で廃寺となった如意山延命寺という寺の本尊であったこの仏像が何らかの事情で加藤嘉作（大正九年没七十五歳）家に伝えられていたのが明治三十年にこの地に寄進され、他の十八体の石像とともに安置されている。

＊　敷地は明治四十一年八月二十日付で加藤嘉作他十四名の共有地と登録されているが、平成十八年現在二十四戸の辻組の共有地と考えている。

＊　参考　（岩波文庫から加藤氏引用）

「観世音菩薩の名を心にとどめている人々は、たとえ大火の中に墜ちこんでも、彼らはすべて観世音菩薩の威光によってこの大火から救い出されよう。また人が河に流されることがあっても、観世音菩薩を大声で呼ぶならば、どこの河においてもすぐ浅瀬が見つけられよう…」

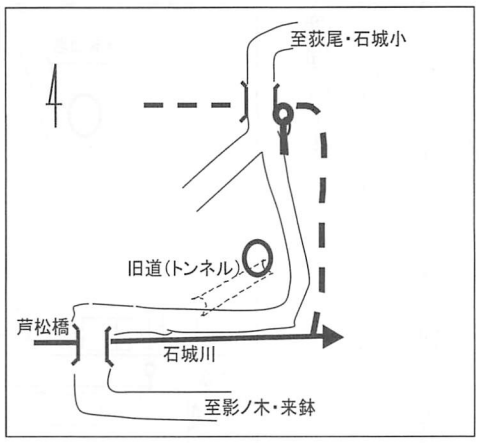
詳しくは、挾間史談会誌二号掲載の加藤照廣氏執筆、「辻地蔵堂」をご覧下さい。

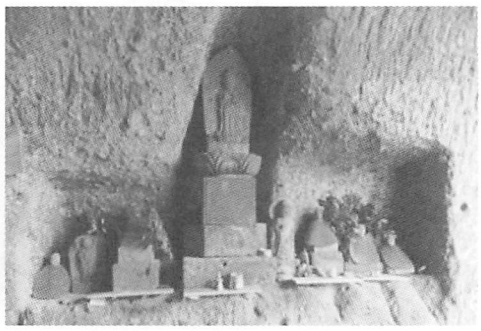
三十番霊場芦松観世音

（一）所在地

挾間町来鉢（芦松）

由布市ユーバス停「芦松」付近





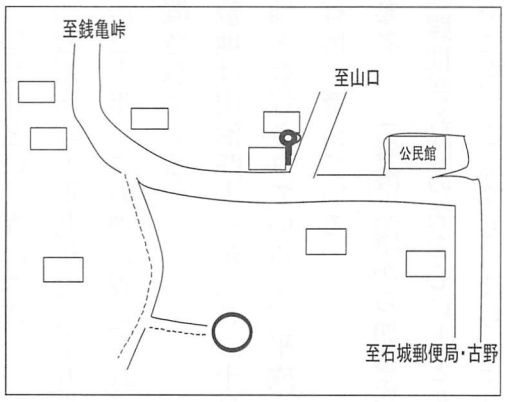
（二）管理の主体
団体（芦松班）で管理
（三）祭りと行事
以前はお接待を班で実施していたが、訪れる人がいなくなったので、実施しなくなった。
（四）由来、由緒
旧道のトンネル内側壁に祭壇をくり抜いて九体の石仏が安置されている。昭和五十六年現在の芦松橋架け替えのさい、芦松側の取り付け道路も一緒に改良された。すなわち、これまで使用していたトンネルを使わず、もうひとつ東側にあった旧トンネルを取り崩し新しい道路としたのであるが、この取り崩されたトンネル内にも祭壇が掘られてあり、そこが最初の石仏安置場所であったと思われる（古谷弘氏）。

＊影ノ木在住のAさん（匿名希望）が平成十年ごろ地元の了解を得たうえで、首の欠けた三体を大分市内植田の石材店で修復した。
＊「お接待」用具として三十枚余の「おへぎ」とよばれる木製皿があったので由布市民俗資料館に展示用として預託した。

三十一番霊場七蔵司観音堂

（一）所在地
挾間町七蔵司

由布市ユーバス停「七蔵司」付近



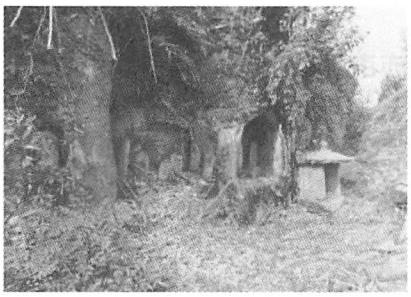
（二）管理の主体
団体（七蔵司）で管理
（三）祭りと行事
一月十八日と八月十七日に講、五～六人で料理を持ち寄り、供え

て心経をあげている。盆正月前には地元老人クラブで草刈や掃除を実施。水の便が悪く、ペットボトルで水を持っての花のお供えがきつくなり、毎月の花あげはいつのまにかしなくなった（庄ムツ子さん）

（四）由来、由緒

昔は賀来や南大分方面から多くの参拝者が訪れていた。桜もよく咲いたし、前庭での盆踊りも盛んだった。

（お堂は昭和四十六年に瓦葺きに修理されたが、お堂周辺の叢の中には左の様な石仏が多数安置されている。勝手気ままに安置されたような配置である。その数だけ祈りが込められていると思えばこれぞ霊場かとも思う雰囲気であった。）



三十二番霊場山口米山観音堂

（一）所在地

挾間町山口　米山（松田春美氏宅敷地内）

（二）管理の主体

団体（米山三戸）で管理

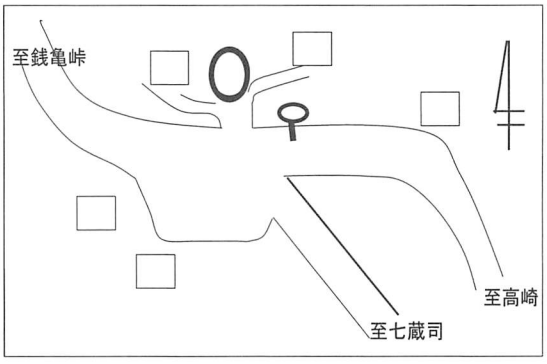
（三）祭りと行事

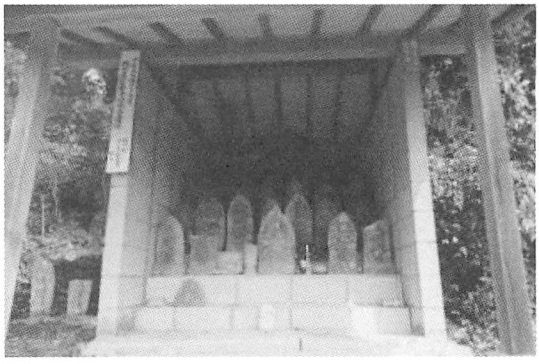
お接待（三月のみ）

（四）由来、由緒

詳細は不明、戦前は近在からとても多くの人々のお参りがあり、賑やかな祭りだった（松田春美氏）。

由布市ユーバス停「米山」付近





三十三番霊場高崎惟福寺

（一）所在地

挾間町高崎三六四　惟福寺内

（二）管理の主体

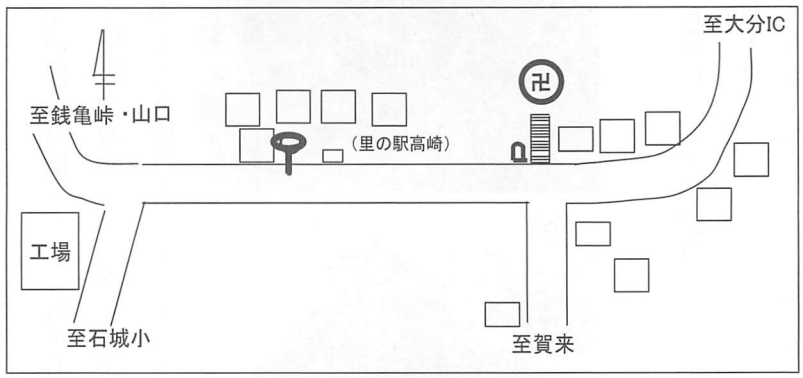
個人（惟福寺）

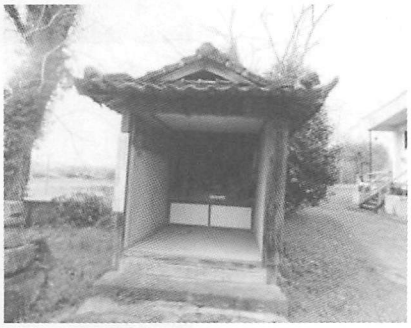
（三）祭りと行事

お接待の日は、堂からお大師さまを寺の部屋に持ち帰り、こちらでお供えをして心経をあげています。観音堂としての行事はとくにありません（住職の母、西山カツヨさん）。

（四）由来、由緒

由布市ユーバス停「高崎西」付近





＊観音堂は門のすぐ傍にあったが、戦前焼失した、再興されずじまいで、今建っているのは大師堂。

＊お大師めぐりの八十八ヶ所については山門下の碑に「明治三十六年世話人が寺に集まり、弘法大師四国八十八ヶ所の霊場として高崎に七、山口に九、七蔵司に八、三船に九、東院に十二、角前に八、中組に六、女狐机張原に五と奥の院、金谷迫に十、柞原に七、新村に一、上宮苑に五合計八十八の場所を相謀り春秋巡拝、大正十一年から同十五年にかけて東院の首藤武吉以下七名で霊場を修理復旧した（要旨）」との昭和十九年五月二十一日付の「二ノ四国由来」刻文あり。「奉巡礼西国三十三所塔」の碑が、山門を入ってすぐ右手に保存されている。